

隠された優生思想の表出

殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」＝2016年、相模原市緑区



相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の前松重被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

相模原殺傷事件契機に小説執筆

辺見庸さんに聞く

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されなくてもいい」といった言わば前提が私たちの内面ととくに破壊していたことをあらわにしたからです。「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する。植松被告、私は「さくくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったと

感じている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に送法は「さくくん」と同じ論理に立っていることを最も単純な形で証明することになる。

偽装

私は月という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園」の職員「さくくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもち」ことができる人「さくちゃん」という人物をつくりました。さくちゃんは痛み

死刑は被告と同じ論理

の中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまつた」という偶然的なものではなく「気付いたらそこにあった」という偶然によるものです。

意識とは関係なく「在つてしまつた」という存在について、私にはどうも「そのいづれも」が「ない」と思える。「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く「選別」が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程をひろげれば、企業では人事評価で「良い社員」か「そうでない社員」を分け、強者と弱者、美しい者と醜い者、正気な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテ

まりの文言「オキノドクニ」や「あからさまな嘆息」



「月」の巻紙

本音

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい。「存在」を意識から消したい。えたいの知れないそんな本音が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太い針を打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に

に登場させれば「ハートウオーミング」な文脈に回収してしまつてしまふ。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはどこでもないもので、それに見合つてアリエナイが番組には全く欠けています。

本音は自分の周囲から排除している人、見ないふりしている人々、忘れようとしている人たちを「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

進んだ時の論理を「そこではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは世間や社会に同調せず「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における「厳しさ」が問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

で自身の姿を想像する。「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるさくちゃんは「だれよりもそつちよく」な職員「さくくん」に心を許している。だがさくくんはある日「〈敵対者〉の空気をまとってやってくる。

へんみ・よう 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。



へんみ・よう

第2譜 (図は□2四角までの局面)

香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香

先手▲三段 清田 翔
後手○二段 山田 晃寛

先手が焦点

黒43では、黒67、白68、黒64とする激しい手もあり、その手が、長手数数の読みが必至になる。黒43、47の常手手段には、白は白46で白47と切り渡すのが面白い。以下黒46、白A、黒62、白68、黒66、白B、黒48、白Cとなつて黒はさつぱりな結果なので、黒43では、黒47、白44、黒Dと平易におさまつておきたから

第67期 肥後本因対戦

相模原市予選 A組 決勝

白五段 宮川 秀樹
黒六段 東 龍司

第2譜 (図は□2四角までの局面)

香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香
香	歩	銀	金	玉	王	将	馬	歩	香

先に、黒67、79は当然発だが、黒8は黒87との手厚い攻めだった。黒85はつらい形なので、黒88は黒88の形で、白82には黒87に黒86と応じれば、黒88の形が整つて、黒89、95と封鎖形に、黒85の優位な局面が白88、100と打開を図る中、上辺の着が焦点となっている。(今村敏)

第67期 肥後本因対戦

相模原市予選 A組 決勝

白五段 宮川 秀樹
黒六段 東 龍司

第2譜 (41~100) (6目半コミ出し)

寄稿

カタールとスペインの対立を打開したいのは誰か

ミケル・ストルベル



カタールの独立運動は世紀以上に始まったといふ多くの人は驚く。2017年10月1日、カタールで行われた住民投票の結果は、自由を勝ち取ったイスラエルやトルウェーを賞賛するカタール

られた。しかしカタールは、これらの方国と同じ自由を未だ獲得していない。合軍と兵に、第2次世界

カタール人は、第1次大戦では義勇兵として連戦を繰り返した。第2次世界

カタール人は、第1次大戦では義勇兵として連戦を繰り返した。第2次世界

経済への支援と富の創出のため利益を再投資することに注力した。スペインは何世紀の間、戦争や征服に明け暮れたため、交渉による問題解決は彼らの流儀ではない。

は固有の民族として存続し続けること、問題を住民投票で解決することを望んでいる。交渉が行き詰まった状況で、国際社会がスペインに対し対話に応じるよう

圧力をかけなければ、この深刻な危機が解消される可能性はほとんどない。歴史や現状として人々の切なさを思い、カタールと琉球にはいくつかの類似点があると多くの読者の皆様には感じられるだろう。

ニヤ自治州で独立の是非を問う住民投票が行われてから半年が経過する。自己決定権の行使を巡り中政府と対立する点で沖縄とカタールニヤの現状を、カタールニヤ国民議会議長のアブドゥル・ムハンマド・アブドゥル・カリーム・アブドゥル・カリーム氏に寄稿してもらった。

「カタールニヤ」は第2号掲載ですが、今は7月で掲載しました。

導いてくれる。その書物は



へんみ・よう 1944年宮城県生田支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼(め)の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下」のぬるい水、「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

「存在」とは、主観から消したい、主観の知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基底に

文化

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。人間は平等であり、人権は守られる。「人を差別しても、されなくてもいい」といった言わば、誰もが平等が私たちの内面とくくは破壊していったことをあらわにしたからです。

相模原殺傷事件 16日に判決

辺見庸さん(作家、詩人)インタビュー

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の前松被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

私は「月」という作品で世の中をよくしなければならぬ」と考える「園の職員」として、目を見ずき行かざる、しかし自由に「おもちゃ」が出来る人々を「おもちゃ」という人物をつくりました。きーちゃんとは、

隠された優生思想表出 死刑は被告と同じ論理

の中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまふ」ことは、主観的にあるのではなく「察したらさうだった」といふ偶然によるものです。

「選別」の射撃を打たれば、企業は人事評価で「良社員」かそうでないかを

には全く欠けています。本音は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、恐れおのの

暗い風を傷ついたのでないか。それを自分で対象化し、消化することができなくな

偽装

真意とは関係なく「在つてしまふ」といふ存在について、私たちがとりあえず「そういふものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」な

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまに「トータルメンタル」な文脈に回収してしまふ。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さ

相模原の事件は太い糸を打ち込むような出来事でした。なせなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「ま」とんは「社会的産物」であり、事件は「人格の問題

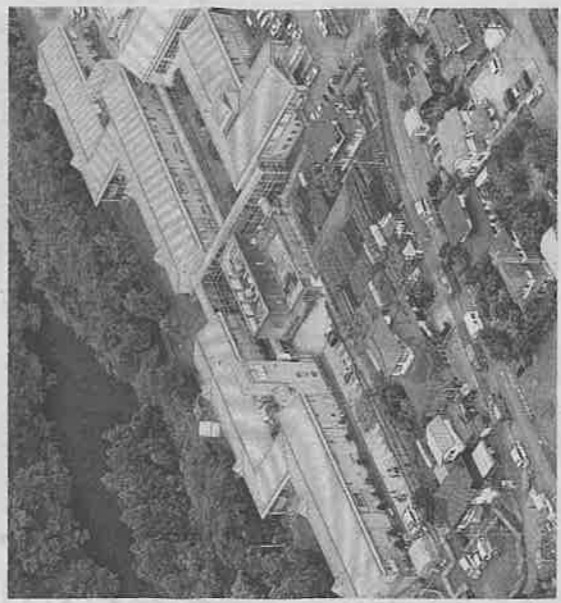
「ま」とんは施設で働いている時、障害者を取り巻く

「ま」とんは、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかつた。何かを保留すること、抑

「ま」とんは、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかつた。何かを保留すること、抑

「ま」とんは、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかつた。何かを保留すること、抑

「ま」とんは、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかつた。何かを保留すること、抑



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」。2016年、相模原市緑区

琉球詩壇 蘇生 竹嶋良騎 焼いたやつ あげる どうかのお菓子屋さんの袋に

アイヌ文化交流 活発化向け合意 北海道と三重 北海道と三重は、このほど、北海道庁と4月に

や詩人のまど・みちお、谷川俊太郎らとの出会いがあった。日本詩壇に對し、自ら白首に